

# J.PIAGET



Geant de la psychologie du xxe siècle ,fondateur de l'épistémologie génétique

7月25日26日 Summer Seminar 2016

第20回夏季研修会 会報誌 主催：日本ピアジェ会 後援：株式会社メイト



『分類概念』

斎藤 法子・・・・・・・・・・ P3

日本ピアジェ会20周年記念パーティ風景  
・・・・・・・・・・ P6

ペタペタシール遊び実践発表について  
助言者 大石 富士子・・・・・・・・ P8

べたべたシールあそび実践発表・・・・・・ P9～P11

鴻池学園幼稚園・遊々幼稚園  
東山東幼稚園

文学紀行NO.31  
石川 晴子・・・・・・ P12～P14



## 臨床心理学

カリフォルニア州立大学院  
名誉教授 斎藤 法子

### ピアジェ理論



今回の講演内容は今迄と少し異なる視点、臨床心理学 (clinical psychology) について述べていきます。この分野は認知心理学のジャン・ピア

ジェ、性的心理学のジークムント・フロイト、人道主義心理学のエリク・エリクソン、精神心理学のカール・ユング、が同じ1900年代前半に心理学の分野をそれぞれ開拓してきたきました。

この中でもピアジェ博士は認知心理学者であり、「知識とは何か」を探求した哲学者でもあり、「知識の進化とは何か」を探求した生物学者でもあります。この哲学と生物学を臨床心理学を使用して組み合わせることで、思考力が如何に発達していくかを解明し、遺伝的認識発生論を打ち出しました。最終的には内面的な思考力がどのように形成するかを考えたのです。

### ピアジェの遺伝発生認識論

知識には物質・物理知識、論理・数知識、社会 (習慣・言葉) 知識の種類があります。それらは、物質の内部に備わっている外面知識と人の頭の中で関係付ける内面知識に分けられます。外面知識は対象を「見たり、触ったり、食べたり、匂ったり、聞いたり」五感を使って獲得していく知識を指します。リンゴの例をあげると、リンゴを理解するのに、五感を使って匂いや食感、手触りで対象を認識していくことがそれに当たります。

一方の内面知識とは、知識がその物自体には存在せず、他の物と比較したり、対称したり、関係付けたりして得ていく知識を指します。発達には、五感を使って理解していく認識と、比較、関係付けして認識していく、この2種類の知識が必要となり、

0歳～2歳「感覚運動期」

2歳～6歳「前操作期」 (自己中心性)

6歳～12歳「具体的操作期」 (脱自己中心性)

12歳～「形式操作期」 (自律)

の段階を経て発達していきます。

幼少期の発達では、外面知識と内面知識双方を経験していくことが大切で、具体的操作期以降になると、徐々に自分で考える (内面) ことが出来るようになり自己中心性から脱していきます。

遺伝発生認識論の原点は、これら感覚能力と知性能力を土台としています。知性能力とは環境に適応していく能力と、新たなものを同化、調節、均衡によって取り入れて、整理できる能力を指します。この知性能力は本質的に自発的行動であり、内面の知性によって構成され、上記の段階によって発達していきます。これがピアジェによって解明された遺伝発生認識論です。

### フロイトの性的心理学



さて次に、オーストリアの心理学者フロイトは、感情、個性、性格、自我 (エゴ) についての発達を解明しようと試みました。例えば、なぜ10代の子は反抗期があるのか? これを人間の本能的な欲望 (Id)、自我 (Ego)、超自我 (Super Ego) によって説明しています。感情の発達に関して構成主義な発達段階を打ち出しています。

フロイトによれば感情の発達は何のように  
なります。

0-1 口唇期 (Oral)

2-3 肛門期 (Anal)

3-5 男、女根期(Electra Complex)

6-10 同一性 (Latency)

12-20 反抗期・生殖期 (Genital)

との段階があり、例えば、口唇期では母親の母乳が問題となり、大人になって、タバコやガム等に依存してしまったり、肛門期は幼少期の排泄の問題（おむつ等）によって、後に潔癖の掃除癖になってしまう等で深層心理を性的なもので解明しようと試みました。

### エリクソン人道心理学



エリクソンは、アメリカの幼児教育者であれば、誰もが知る心理学者です。ドイツで生誕し、母親がユダヤ人であったこともあり、ナチス政権時に大変不幸せな人生を送ったことでも知られています。

彼によると人格形成には、両親、兄弟、文化、学校、すべてが関わり合い形成していくと考えました。人は構成主義感情発達と呼ばれている発達段階を遂げて成長していきます。

0-1	信頼	↔	不信頼
1-2	独立性	↔	恥、疑い
3-5	責任感	↔	罪悪感
5-18	勤勉	↔	劣等感
18-22	個性	↔	混乱
25-35	親密関係	↔	孤独
40-55	成功	↔	不成功
60+	自尊心	↔	絶望

エリクソンの発達理論は生後生まれてから生涯続く段階があるのが特徴で、後ろ向きの感情の場合は、自己投影、自己内省によって性格を変える事ができます。人は自我（エゴ）によって無意識に何かを望みます。物質的な利得であったり、優位性であったり、存在・賞賛・敬意・愛・同意といった精神的な満足感であったりします。

この自我（エゴ）は大きく分けて2種類あり、常に自分に前向きな自我、常に後ろ向きの自我があります。前向きの自我の背後には、自信を持ち、人より優位性を必要とする劣等感の恐怖心が背後に隠されています。例えば高級車に乗ったり、ブランド品に囲まれたりを強く望むことは、背後にはよく見せたいという劣等感が含まれているのです。一方、後ろ向きの自我も同様です。例えば、謙遜の裏側には他人より偉大になりたいという欲望が背後にあり、恥ずかしい（内気）の裏側には、注目が欲しいと思う感情を持ちながら、批判・拒否される恐怖心が大きいことを意味しています。

### ユング精神的心理学



ユングはスイスの精神科医であり、心理学者で、深層心理について研究した人物です。彼は精神分析には自己投影、自己内省だけでは不十分で、スピリチュアルで説明しようと試みました。

スピリチュアルとは心の傷やエゴから離れて、自由になる事を意味し、純粹・平和な感情をもたらします。ちょうどシャンペンを飲んだときにふっと解放された気分になりますが、その感情に近いかも知れません。

さて、このエゴは自分の領土の中に相手を所属させようとする事で、結果両者のエゴが衝突して争いになります。



相手と衝突する際には、相手は私の鏡と考えてみてください。この意味は、こちらが好感を持っていると、相手も好感を持っている、こちらが共感していると相手も共感している、怒りがあると相手も怒りを持っていることが多いからです。実は相手は自分自身の鏡のような存在なのです。例えば「見て！私の服はデザイナードレスよ！」これに対し彼女はいつも自慢ばかりで嫌味な人と感じるかも知れません。その深層心理は実は自分自身も似たような劣等感を持っていることを意味しています。彼女は私と似た劣等感を持っているのだと思えば平和な心が訪れます。相手の領土の中に入らず、「素敵なドレスね」と話せば平和な心が訪れます。相手の心や自分の過去のように変える事が出来ない事を認めて、自身の捉え方を自分で変えられることにだけ注目して、人間関係に陽を照らしていきましょう。

#### 最後に

自分をよく見て、自分について知ること、そして、誕生時の純粋な自分を見いだす努力をすること、もし目の前のことに何らかの問題がある場合は少し振り返ってみる時間を作ってみてください。古代ギリシャの哲学者ソクラテスが2500年前に[Know Yourself]”自分自身を知りなさい”、その弟子のプラトンが[Love Yourself]”自身を愛しなさい”との言葉を残しています。

また、ハワイの言葉で”Be-Aloha”とありますが、生命の息吹という意味合いがあります。後悔少なく生きるために、私自身のWebサイトを作りました。[<http://www.be-aloha.com>]自分に残された大切な時間がわかりますので、是非一度自分の時間を計算してみてください。



今回は、日本ピアジェ会会長松井和男氏、メイト編集部長上原敬二氏のご協力のもと、私自身の自叙伝を出版しました。私自身もこれまで述べてきた心理学的観点から自身を振り返る時間を作ってみました。ピアジェの自己中心性からの脱却、自身を自己投影してみたり、フロイトのエゴについて考え道徳心を考えてみたり、エリクソンの理論のように自分を前向きに尊厳してみたり、ユングのスピリチュアルになる努力をしたりです。

自身について考え、問題が出たときは、自己投影、自己内省をして行動の振り返りをする事の連続です。皆それぞれ一人一人の人生があり、その背景も様々です。心理学観点からは是非振り返る機会を作ってみてはいかがでしょうか。

日本ピアジェ会20周年 齋藤法子先生著書出版記念パーティ風景



会長 松井 和男先生 挨拶



カリフォルニア州立大学 齋藤 法子先生



副会長 内山 昭先生



児童文学研究者 石川 晴子先生



副会長 伊藤 靖祐先生



専任講師 小林 芳子先生



株式会社メイト 代表取締役会長 竹井 純様



株式会社メイト 相談役 吉田 弘昭様



第20回夏季 ピアジェ研修会ぺたぺたシールあそび教材の実践発表



日本ピアジェ会  
 研究員 大石 富士子

日本ピアジェ会は、20周年を迎え、日頃、幼児教育の現場で、ピアジェ理論を研究し、実践して下さっている各園の園長先生はじめ先生方に心より感謝を申し上げます。今回の研修会での実践発表も、翌日からの保育に役立つ充実した内容で、子ども自身が発見し、積極的に取り組んでいけるようにさまざまに創意工夫されていました。日常の保育ひとつひとつのすべてが、ピアジェ理論につながっており、それを意識しながら子ども達への言葉がけを吟味していく事の大切さを改めて学ばせていただいた発表でした。

また、保護者の方々に実際に教材操作を体験して頂く機会を設けたり、地域の公開保育で、ピアジェ理論の教材指導を見学して頂く機会を作ったりと、積極的にピアジェ理論の素晴らしさを発信されている園もありました。今後も、子どもの自発性を尊重し、試行錯誤を重ねながら、自由で創造的な活動を実践していける環境作りを心がけて参ります。

ご多忙の中、実践発表にご協力頂きました各園の園長先生はじめ先生方、本当に有り難うございました。今後ともご協力宜しくお願い申し上げます。



鴻池学園幼稚園（大阪府東大阪市）

発表者：大石 真央 応用：榎 裕美

年少編：単元⑤りすさんのおちばひろい

目標：色と形による分類

ねらい：色に目をつけて分けたり、形に目をつけて分ける。



導入では、まず買い物ごっこをする設定で、アイスクリーム（赤・青・黄）・ゼリー（赤・青・黄）・キャンディ（赤・青・黄）の中から、自分の好きなものをひとり1個選びました。

どんな物を買ったのか、色や形等、特徴について話し合った後、うさぎの店に並べる方法を考えました。赤・青・黄の色に着目して分類し、どのような分け方ができたのかを確認した後、次にアイスクリーム・ゼリー・キャンディの同じ種類の分類操作をして、店の陳列を完成させました。視点を考えて分けていけるように、その都度、言葉で確認し、理解を深めていけるように導いていました。

応用編では色の違う洗濯物（シャツ・くつ下・ズボン・スカート等）を、ダンスの中に片付けるという操作を、年少・年中・年長の子どもで比較されていました。年少児では、手に取った物をひとつずつ片付けていきますが、年長児ではおよその分類を先に終えてから、一度に運び、またそれを細分化して分類していました。

今までの教材操作の積み重ねが、着目できる視点の幅を広げていき、いくつかの要素を組み合わせると分類していけるようになる事が、よくわかりました。

遊々保育園（岐阜県加茂郡）

発表者：兼松 梨恵・越野 裕子

年中編：単元⑥もりのおんがくか

目標：順序の可逆性

ねらい：順序を逆に並びかえる操作を通して、可逆的思考の土台をつく



女の子がプールに行く設定で、何から着替えるのかを考えて話し合いました。

靴→服→パンツの順に脱ぎ、最後に水着を着るという順番を保存用シートを使い、ひとつひとつ確認しながら並べました。次にプールで遊んだ後に着替える順番を考え、水着を脱いだ後、パンツ→服→靴の順に着ていく事に気付き、保存用シートに並べて確認しました。実体験に基づいたわかりやすい指導で、プールに入る前と入った後の着替え順番が逆になっている事を子ども自らが発見していました。

応用では、絵本「ぶたくん何を食べてきたの」を見て色の順序を逆に並べかえる操作を通して、出発点にもどって考えるという思考の土台を築いていく指導方法を学ばせて頂きました。また、5才児では、おりがみの指導やさいころの展開図からも、可逆性について子ども達自らが発見できる声かけや指導をされており、生活に即した可逆的な活動を発展させる保育を発表して下さいました。

あおば幼稚園（和歌山県紀の川市）

発表者：篠原 佳美・黒野 公美

年長編：単元⑩かみしばいづくり

目標：創造性豊かな言語活動

ねらい：前後を関係付け、筋道を立ててお話を創作する。



今回は、かみしばいづくりの教材の展開シートの活動を発表して下さいました。

シートの絵を見て、どんな所か、何があるかを話し合い、別紙シールを使ってシート上で自由に操作し、言語表現を楽しみました。年長児になると、今まで経験を積み重ねてきた事が、子どもの発想と自由な表現につながっており、因果関係や推論・連続的思考・時間の経過等があふれていて、ひとりひとりが全く違うお話になっており、子どもの豊かな創造力と発想に驚きました。また、同じ子どもでも何回か作るたびにお話がどんどん変わっており、イメージが広がっている様子が、よく伝わってきました。

また、学園内の交流を通して、子ども達の言語活動がどのように活発になっていくのが、自発的に今後はこちらに来て欲しいと意見が出たり、招待状を作って届ける方法を自分達で考えたりと、双方の子ども達がいきいきと楽しそうに積極的に取り組んでいる姿が印象的でした。実際に体験して楽しかった事や心が動いた事が、創造性豊かな言語活動や考える力、表現につながっていると改めて感じた発表でした。



文学紀行No.31

「こどものひとり旅」

児童文学研究家 石川 晴子

『アレハンドロの大旅行』きたむら えり ・さく・え 福音館書店

イノシシのこども、アレハンドロは、お弁当をもってひとり旅立ちます。めざすのは、はるかかなたの丘のてっぺんです。これまで家族のだれもが行ったことがない、遠くに小さく見える丘です。

アレハンドロは、おしゃべり好きでにぎやかな家族のなかで、これまで静かにももの言わずに暮らしてきました。別にしゃべらなくても、だれかがかわりにしゃべってくれるので、なんの不満もなく、そのままじゅうぶん楽しかったのです。

でも、あるとき、おとうさんとおかあさんが「やっぱりへんだ」と思うようになります。こどもがものを言わないのは大きな問題にちがいません。

ひいおじいさんに相談し、お医者さんに診てもらい占い師のところにも行きます。占い師は水晶玉をみつめて「はるかな丘にひとりで旅すればしゃべるようになるだろう」といいます。両親はよくよく考えた末に、アレハンドロを旅立たせる決心をしたのです。

旅立ちの朝、見送りにきたみんなは口々にいいます。ひいじいさんは、「だれかに会ったら『こんにちは』というんだよ」、お医者さんは「ありがとうがいえれば、それでじゅうぶんだ」、占い師は「わかれるときは『さよなら』』」と言うようにいいます。おとうさんが「自分の名前がいえたら、すぐに帰っておいで」というと、おかあさんは「元気に『ただいま』っていっておくれ」といってアレハンドロをだきしめます。

話しを終わるまで書いてしまうと、読む楽しみを奪ってしまいかねないと思いつつ、やはり、話の都合上やむをえずとおことわりして、書いてしまいます。お許しください。

さて、アレハンドロは元気よく、すたすたと歩いていきます。きっと心の中で、「こんにちは」とか「ありがとう」とか言おうと決心しているにちがいありません。ところが、途中で会ったグアナコは「こんにちは、どこへいくの」と聞き、アレハンドロがだまって遠い丘を指すと、「気をつけていくんだよ」といって、さっさと行ってしまいます。アレハンドロが「さようなら」というひまもありませんでした。アルマジロの親子は昼寝をしていたので、声をかけるのはやめました。タニシは川を渡る方法を教えてくれたのに、「ありがとう」をいいそこないました。背中のにせてくれたダチョウは、あまり速く走るのので、アレハンドロはふり落とされ、「ありがとう」も「さようなら」もいえませんでした。

ようやくたどり着いた丘のてっぺんでアレハンドロが目にしたものは何だったのでしょうか？ 予想もしなかった壮大な景色が広がっていたのです。白い雪をかぶった山々が、雲よりも高く空に突きささるようにそびえていました。アレハンドロは思わず山にむかって呼びかけていました。「こんにちはー」とすると、なんと山が「こんにちわー」と答えてくれたではありませんか！ アレハンドロがうれしくなって、「ありがとうー」と叫ぶと、山も「ありがとうー」といってくれました。こんなうれしいことはありません。アレハンドロはとんだり、はねたり、おどったりしました。

やがて、夕焼けで山が染められると、アレハンドロは「さよならー」と山に別れを告げます。「さよなら」と山もあいさつしてくれました。アレハンドロは生まれてはじめてちゃんとことばであいさつを交わしたのです。

もちろん、帰り道では、来る途中で会った動物たちとあいさつをしあいます。そして、暗い夜道を歩いて家に着くと玄関の外で待っていたおかあさんとおとうさんのところに走っていきながら叫びます。「ただいまー」

アレハンドロは、ほかの人とちがって、口をきかないこどもでした。親や先生といった周りにおとなは、このようなこどもをどうすればよいのでしょうか。大きな問題です。この『アレハンドロの大旅行』は、問題をのりこえたアレハンドロと両親を描いています。



アレハンドロの冒険記  
 山道はなかなか険しいけれど  
 動物の助けで乗り越えよう！  
 冒険の始まり

アレハンドロ  
 の冒険記  
 山道はなかなか  
 険しいけれど  
 動物の助けで  
 乗り越えよう！  
 冒険の始まり

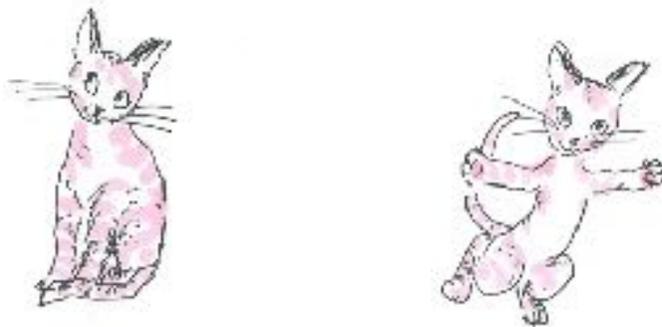


小学校低学年くらいまでの子どもたちにとっては、周囲にいる親しいおとなに本を読んでもらうのは、とても大切な経験だと思います。自分で字を読むこととおとなに声を出してよんでもらうこととはかなりちがう経験です。

この本は、子どもとおとなが一緒に読むのにとくに向いている本ではないかなと思います。子どもは絵を見ながらアレハンドロを自分に重ね、アレハンドロの周りのイノシシたちや動物たちを自分の家族をはじめ周りのおとなたちと重ねて、アレハンドロとともに旅を体験します。子どもだけでなく読んでいるおとなも、アレハンドロの両親や家族、それから出会った人々（この本ではイノシシはじめ、アルゼンチンにいる動物たちですが）のアレハンドロへの対応のしかたに思いあたることを見出したり、学んだりしながら、子どもの気持ちにもあつて、物語を経験します。

本の世界は現実ではありません。けれどもフィクションという形ならば、現実のさまざまな条件から解放されて自然に素直に物語の中の出来事を受け入れ、生きていくうえで大切なこと無意識のうちに身につけられます。わたしたちは社会に生きている人間なので幼い子どもをひとりではるかな丘をめざす旅に出してやることはできません。でも、物語の中なら、イノシシの親ならイノシシの子どもにひとり旅をさせれますから。

成長する子どもにとって大切なのは、ほかのだれでもない自分が納得して、身も心も存在の全体で「そうだ!」「これだ!」と感じているいろいろなことを身につけていくことです。単なることばや絵だけで学んだ、頭では重要だとわかっている、いつのまにか頭から抜け出してしまいます。アレハンドロの話しを子どもといっしょに読むのをすすめるのは、ふつうなら子どもがやらないこと、やれないことを、ひとりで大冒険をして、自分でとびあがるほどうれしくなって、「できた!」とか「このことだったのか!」と心から感じる経験を物語のなかでいっしょにすることになるからです。おとなとしては、アレハンドロとともに大旅行をし大よろこびをしている子どもを、かたわらから見ているのと同時に、アレハンドロを見守るおとなの気持ちも味わうことができるからです。



「おれ、おれが  
ほかにいなくていい？」





## ピアジェ研究所

学校法人 鴻池学園第3幼稚園敷  
地内

〒573-0104  
大阪府枚方市長尾播磨谷1-4051

Tel 072(855)3777  
Fax072(855)3779

Copyright(c) 日本ピアジェ会.,Ltd. All rights reserved.